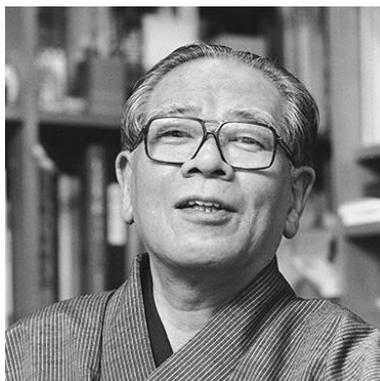


『Mind Charging』

第 160 回 発行：入試広報室 発行日：令和 2 年 11 月 24 日

池波正太郎の名言



一椀の熱い味噌汁を口にしたとき「うまい！」と 感じるだけで、生き甲斐をおぼえることもある。

この言葉を知ることで、わかりやすく大きな喜びを感じるだけで幸せではないということや、日々の生活の中で『ありがとう』と思う瞬間は何回もあります。そういった“人の愛情”や、“自分が今ここにいること”に、改めて感謝の気持ちと、これは生き甲斐をおぼえるほど本当に幸せなことなのだ『初心に帰る』ことができました。ありがとうと思う瞬間があるということは、自分のことを考えてくれている人がいるということです。ということは、自分も仲間を思いやることにより、ありがとうが拡散されていくということです。『幸せの連鎖』は、自分たちで起こすことができるのです。

私が普段心がけていることは、挨拶や日常のとりとめもない会話などによってコミュニケーションを取ることです。あまり意味のないことなのかもしれませんが、このことは以前からしていたのではなく、ここ数年間は意識的に行っていることであり、以前と比べて挨拶を返してくださる人や、挨拶だけでなくそのまま日常会話に発展していくシーンや、私の業務に対して応援の言葉をかけてくださる方が増えました。また、コミュニケーションを取ることが増えたおかげで『ありがとう』と言っていただけでも増えました。その度に幸せな気持ちになります。言う側も言われる側も幸せになる『ありがとう』という“魔法の言葉”が溢れる正智深谷でありたいものですね。（編集委員：入試広報室 鈴木）

池波 正太郎(いけなみ しょうたろう、1923 年〈大正 12 年〉1 月 25 日 - 1990 年〈平成 2 年〉5 月 3 日)は、戦後を代表する時代小説・歴史小説作家。『鬼平犯科帳』『剣客商売』『仕掛人・藤枝梅安』『真田太平記』など、戦国・江戸時代を舞台にした時代小説を次々に発表する傍ら、美食家・映画評論家としても著名であった。1923 年(大正 12 年)1 月 25 日、東京市浅草区聖天町(現在の東京都台東区浅草 7 丁目)に生れる。父・富治郎は日本橋の錦糸問屋に勤める通い番頭、母・鈴は浅草の鋳職・今井教三の長女で、正太郎は長男であった。この年、関東大震災が起り、両親とともに埼玉県浦和に引越、6 歳(1929 年)まで同地で過ごす。やがて、両親は東京に転居。正太郎は根岸小学校に入学する。商売の思わしくなかった富治郎は近親の出資によって下谷上根岸で撞球場を開業するも、両親不和のためこの年に離婚した。

(Wikipedia 参照)